



《グ ル 一 プ 討 議 一 日 目 武 田 数 宏 先 生 》

## 『宿泊研修参加感想集』 「初禊完うするも草履行く」

嶋田 泉世話人

- ◆ A グループ
  - ・ 技より心。心は自分で鍛える。
  - ・ 挨拶は先手必勝。二倍返し。
  - ・ 人間力アップのハイの返事。
- ◆ B グループ
  - ・ 先祖を知る。
  - ・ 心の持ちよう。  
(逆転の発送)  
(しらすの心)
  - ・ 慈愛のこころ。

- ・イチノおばあちゃんの生き方に感動。
- ・「しらす」の心。
- ・逆転の発想。（そごうの広告）

- ・世直しは余直し。
- ・祈る人。慈悲の心。
- ・今年のお米は大丈夫かねつ。

そこで聞こえてくるのは、「逃げではないのか」ズボンつと一気に肩まで、冷たい川の中へ！一瞬、生気を持つていかれそうになつた。遥かなる虚空には龍？お迎え？：あかん！深呼吸だ！講師・山崎さんの言葉を思い出し、気を取り直して深呼吸を始めた。ゆつくりとゆつくりと。生氣戻るも、体の震えが止まらない。「五十鈴川」の歌も何を唱えていいのか。手足が麻痺してきた。山崎さんの掛け声でようやく禊が終了。心の隙があつたのか、サンダルを掴み切れず、川の流れに持つていかれた。体の表面は冷たいが、逆に、体内はとても自分が命の源に感動を覚えた。自分に克つ！命の源に感動を覚えた。全體調和に向かえる。克己復礼！利己に克つと笑う。克己復礼！利己に克つと

11月の人間学塾・中之島は、秋季宿泊研修が伊勢修養団研修センターで開催されました。私は修養団を知らず調べてビックリなんと私の故郷である福島県喜多方市出身の蓮沼門三氏が作った団体ということを知りました。

当日は東京から名古屋を経由して伊勢へ名古屋からは近鉄特急「しまかぜ」で向かい偶然にも先頭車両に乗れ、幸先の良い出発となりワクワクしながら伊勢に向かいました。昼前に着き伊勢うどんを食べ腹ごしらえ、いよいよ研修の始まりです。

冒頭で伊勢の人は伊勢に来た方への挨拶は「お帰りなさい」と挨拶をするとおっしゃられていきました。私の苗字は磯部、伊勢の先には磯部という土地があります。昔祖父がご先祖様は三重から来たと言つていたのを思い出しました。そして夜、灯火の集いで、親・祖父母を思い出し涙がぽろり改めて孝行をしなくてはと思いになりました。いよいよ水行へ五十鈴川に入った瞬間、足は進まない、体の芯からの震え、自分の心の弱さを身をもつて知るよい機会になりました。

2日目はまず伊勢神宮参拝でお札と祈りを捧げ、斎藤先生の講話は、学ぶところがいっぱいでした。話しが終わり私は志が大切でこの志が行動に変わった時に自身が変わりすべてが変わつていくのだと思いました。最後に、「いってらっしゃいい」と見送られ研修が終わりました。私は身は、研修を終え「一隅を照らす」人間になることを決意しました。研修所を後にしました。

今回研修の機会を頂き、修養団の皆様・講師の皆様、人間学塾の皆様・世話人の皆様、また家族・社員にお礼を申し上げます。「ありがと



### ■かけがえのない師との出逢い

医者は小学一年生からの夢でした。医学部を目指し進学、卒業して晴れて医者になりました。最初は地元の大きい病院に入った。そこでは忙しくもちろん大変勉強になつたのです。その後雑誌で見つけたのちに終生の師匠となる沖縄の井上徹英先生を訪ねて浦添総合病院を選びました。井上先生は「人を救うヘリが飛ばないとは何事か」と離島医療に情熱を持たれていました。（後にドクターヘリ運用の民間病院の先駆けとなる）。

ドクターコトーのモデルとなつた瀬戸上健二郎先生との出逢いは、この病院での講演でした。なんとその時、僕が先生の代診を頼まれたのです。

先生とは半日一緒に働いたのですが、それがすこかつた。若い女性が甲状腺のしこりで来られたので、僕は丁寧に診察し「たぶん癌じゃないから安心してください、専門の病院へ行くように」と伝え、手紙も書いた。ところが奥から先生がやってきて、針で患者のしこりを刺して「癌じゃないわ」と伝えたうえに、血液をプレパラートにとって、看護師に船で送るよう伝えられました。僕は患者さんを船で送るところを、先生はガラス板一枚送るだけで済ませてしまう。医者一人の力でこんなに医療が変わってしまうのかと実感した瞬間でした。

### ■僻地医療の難しさ

瀬戸上先生との体験からも口が裂けても離島医療に携わりたいなど言えないと思ったのですが、医者になつて十年目に徳之島へと行きました。ある時夜中の十一時に脳出血の患者さんが来られた。呼吸も止まりそう、瞳孔も開いてくる。助けるには脳の手術しかないが、脳外科はないので、外科の院長と僕とで頭に穴を開け手術するしかない。

当時テレビ電話はなく、ファックスのやり取りを見ながらやるのです。そのうち自衛隊のヘリが到着しました。徳之島ではその少し前にヘリの墜落事故があつたこともあり、島民は島内で医療を受けたいと思つています。また本来自衛隊ヘリは災害救助のためであり、救急搬送用ではないのです。

その後、井上先生の元で再研修し、先生は北九州でドクターヘリを立ち上げ、またドクタージェットの立ち上げに取り組んでおられました。そののち、東北大震災があり、このドクタージェットが大活躍しました。

### ■プロとは

夢を叶えて医者になつたはずなのに鬱状態の時期も体験し、また新たに歩みだそうとするとき、大学の恩師にこう言われました。「新しいこと始めるときは川を上りなさい、海を渡りなさい」。川を上るとは歴史を遡る、海を渡るとは海外を見れば必ず同じ課題がある、ということ。

その後、僻地医療の先進国であるオーストラリアの離島のクリニックなど訪ねました。そこには

人のために、患者のためには簡単です。しかし自分の技術を磨き続ける喜び、それがひいでは人々の喜びになる、これこそが一流であり続けるための方法だと思います。

ク大学の医学部長から「物事を成し遂げるときは、二年間で終わらせよ」と言われました。この二年間という数字は後々自分にとつて大きなものになりました。先人のやり方を完全にコピーしたらよい、というアドバイスも得て取り組んだのが二〇一七年のこと。離島・僻地で取り組む医師育成のためのプログラム「日本版離島僻地プログラム(RGPJ)」を立ち上げました。ここでは、離島僻地での①医者になりたい②医者を育成したい③すでに戦っている医者を支えたい。その三本柱です。今立ち上げから7年が過ぎ60人が卒業し全国9か所に医者を派遣することができました。

二〇二〇年ドクターコトニー代目の先生が引退されることとなり、僕に引き継ぎの話がありました。当時同居している妻の両親は共に重篤な状態でしたが、妻は一言「行くしかないでしょ！」。大きな決断をし、島に一つしかない診療所で三年間務めました。

プロとは、いつでもどこでも誰とでも同じクオリティの仕事ができることだと教えてもらいました。その意味で松井・イチロー・大谷、日本の四番バッターは皆プロです。これから僕は故郷にもどりプライマリーケアに尽くしていくこうと思っています。瀬戸上先生はある賞の授賞式においてこう言われました。「医者として一番嬉しいことは医者としての技術が上がるのこと。それが結果として地域住民のためになればこんなにうれしいことはありません」。

## ◆Aグループ

- ・新たなことを始めるとき、川をのぼること。海を渡ること。
- ・価値観をみつけたとき、行動できる。
- ・やりたいことをやり続ける。
- ・来た球すべてがストライク。

## ◆Bグループ

- ・医者として一番嬉しいのは、医者としての技術が上がるのこと。
- ・新しいことを始めるときは、川をのぼりなさい。海を渡りなさい。
- ・プロとはどこへ行つても同じクオリティで仕事ができること。

## ◆Cグループ

- ・いつでも誰とでも同じクオリティで仕事をできることがプロ。
- ・根拠のない数字でも実践者の言葉は説得力がある。

## ◆Dグループ

- ・いくつになつても自分の技術を磨く。
- ・それが地域のためになることが喜び。
- ・プロとはいつでもどこでも同じパフォーマンスの仕事ができること。

## ◆Eグループ

- ・新しいことをする時は、歴史と海外を参考にする。広い視野を持つ。
- ・小学生の頃の夢を叶えたことがすばらしい。
- ・プロは場所が変わつてもできる。

## 秋季宿泊研修 於 伊勢修養団



武田 数宏 先生 ご講演 ありがとうございます。



「齋藤 学 先生 そしてオーストラリアから来られた僻地医療に取り組むドクターお二人」



童心行で童心に！

山崎 政弘 先生 今年もありがとうございます！

さあ！イザ 水行へ！予行演習！



武田 数宏 先生 懇親会まで！

『人間学塾・中之島』次月日程

「喜べば 喜び」「どが 喜んで」

## 編集後記 「流汗鍛

# 塾生講話 塾生復活

先生に学ぶ。中之島では、先師や講  
師からもお互い学びあります。一月は、  
原周作塾生・川村さゆり塾生から  
ご講話いただきます。

A portrait of a middle-aged man with short dark hair, wearing glasses and a light blue button-down shirt. He is smiling slightly and looking directly at the camera.

原周作塾生



川村さゆり塾生



新規塾生

藤井 優和  
先生方の講演や皆様との交流を通して知見を深め、視野を広げたいと思つております。

「自分もまわりも本当に幸  
せな調和の世界にいたしまし  
た。」  
久美 濱田



新規塾生

くだけで慈愛に包まれていく温かさを感じ、自然に涙が溢れました。

四年後の平成二十七年三月、中山靖雄先生はご逝去されました。お出会いから十一年が過ぎ、今も奥様の縁様とご縁を紡いでいます。

先生は、やりとりの言葉をたくさん教えて下さいました。「喜べば喜びごとが喜んで喜び集めて喜びにくる」この言葉を心に刻んで、生きていきたいと念(おも)っています。

## お願い

①中之島ニュースは塾生・登録塾生の方用に作成しております。  
事務局・編集部に無断で転載や特にコピーなどを配布することは、ご遠慮ください。  
よろしくお願いします。

②編集部アドレスは下記のとおりです。  
事務局とは異なります！  
感想文・文集・投稿等はこちらに↓  
お願いします！

2012nakanoshima@gmail.com

初参加の方、嶋田泉世話人、磯部泰司  
塾生に感想を書いて頂きました。お二人  
とも水行も初めて：伊勢参拝やすばらし  
いお二人のご講演もよかつたですね。  
近藤宏枝世話人のエツセイも伊勢の父  
中山靖雄先生の原稿！いつもありがとうございます。

編集長 西村俊幸

「流汗鍛錬」 「五十鈴川 清き流れの  
すえ汲みて 心を洗へ 秋津島人」 まだ  
水行の余韻が残っていますが、すっかり  
世間の垢にまみれて、穢れてしまい…  
伊勢宿泊研修はいかがでしたか。参加  
できなかつた方も少しでも雰囲気を味わつ  
て頂きたく今号はページ増としました。